

# 生命の木

青木由弥子

系統樹を見ていると

不思議な感慨がわいてくる

一つの根元から

フラグメントに解体していく

それが生命の進化なのか

分岐しながら

あらゆる可能性を試しては消えていく

それが生命の成長なのか

一つの根源から

あらゆる可能性に向かって分岐していく

それは人も同じだ

フラクタル理論を引くまでもなく

あの日あの時あの選択が

分岐をうながし一方の枝をのばし・・・

花のつく枝はごくわずか

実のつく枝はさらに少ない

無限に繰り返される分岐の果てに

萎え衰えていく枝のいかに多いことか

切り落とされる枝もあり

自ら枯死する枝もあり・・・

だが 選択されなかった枝も

透き通りながら

パラレルにのび続けている

そして

月の美しい晩や朝焼け夕焼けの照り映える刻

光の加減によつて

枝に七色の生命が宿る

象牙の枝とガラスの枝と

彼らはのびることをやめない

その上

胴ぶきした芽やひこ生えの枝

枯れ枝もからんで

手もつけられないほど

まるでジャングル

折れないように

からまないようにと

手を加えれば加えるほど

野放図に暴れる枝ぶりに

疲れ果てて

いつしかあきらめ

放置したまま・・・

私の木は私が剪定しなければならぬ

そうずっと思い込んでいた

しかし 思いがけぬところから

突きあがるようにのび出る枝を

私の意志は選別し得ない

あきらめてまかせきり

見上げることすら忘れた果てに・・・

何百年が過ぎたのだろう

気づけば木は

枝どうしもたれあい支えあい

それぞれの枝が

陽を求め風を受けつつ

まるやかに枝葉をのばして

静かに営々と

のび続けている

天空に広がる網の目の向こうに

煌々と星がきらめく

その光が 針金のように細く長く

網目を透かして地に降り注ぐ

次第に明るんでいく丸天井の下

藍から葦そして浅葱へ

網目が色を移していく

やがて蘇芳から紅へと色は移り

山吹色の朝日が射して

蒼穹を覆うガラスの枝は

溶け込むように青に消えて

あとはただ 吹き通う風

ああ そうか

手を加える必要など無かったのだ  
のび方は木が知っている

私は見ているだけでよかったのだ

ゆだねればそれでよかったのだ・・・

ブルー・パープル・グリーン・イエロー

明滅する灯を芯にともして

透き通った枝が

とどまることなくのび続けている

その中央に

一本の舍利

その白々とした輝き

私が今 立っている場所

# 詩による試論…たとえば「人魚姫」について

青木由弥子

心の中に降りていき

その廣大無辺に出会ったときに

「詩人」は何に仮託するのか

賢治は銀河宇宙をさまよい

ノヴァーリスは地底を巡り歩いた

彼らの未完の試みは

その彷徨の壮絶さをこそ

余すところなく伝えてはいまいか

アンデルセンの人魚姫は

「海」の中では自由だった

「陸」では自在に泳ぐ力も

「声」すらも奪われてしまう

想いを伝える「声」を失い

自由に泳ぐ「尾」を捨ててまで

明晰な光に照らされた「陸」に

ロゴスの世界にあこがれ続けた

「海」の暗部に育った少女

少女は仮初めの命は持つが

永遠不滅の魂は持たない

享楽の海で三百年間

遊び暮らして泡と消える

…永遠に消え去る定めであった

少女をロゴスの世界へと

引き寄せたものは何であったか

暗闇の「海」に溺れかけた

ロゴスの世界の王子を救い

再び「陸」へと送り届けた

少女の思いは那边にあるか

人魚姫の王子への恋は

初めは未知への憧れにすぎない

けれども人の愛を得るなら

そして「結婚」を誓い合うなら

人魚は魂を分け与えられ

永遠不滅の生命を得ると

海の智者に教えられて

恋は意志へと変貌する

「海」の娘の美しさとはかなさを

そのもどかしさと切なさを

「陸」の王子に伝え得るか

安住と享樂を捨て

痛苦と孤独を選び取ってまで

永遠不滅の魂を得たいと

望み続けた「海」の娘の渴望を

「陸」の王子に知らしめ得るか

それは形無きまま「海」より生まれ

「言葉」という形を与えられねば

再び虚無の世界に消え行くしかない

「海」より生まれるイメージの定め

無意識の海より湧きいずる形無きものたちは

言葉という形を与える明晰な理性に

恋い焦がれ渴望するのだ

言葉によって魂を付与され

永遠に「陸」にあり続けることを

王子を死の闇から救い出した麗しい人魚姫は

「陸」では素性を伝える声を奪われている

「海」の娘の真実の姿を

その本来の豊かさを

「愛」によって開かれた

王子の曇りなき眼が

再び見出すことができるか

王子は詩人のまた別の姿だ

尽きることなく湧き上がってくる

美しいイメージを

言葉に留めてこの世につなぎとめること

一瞬のイメージとの邂逅を

逃さず余さずすくい取ることを

形無きものたちは詩人に厳しく要請する

形無きものの呼びかけを

その声を姿を 自らへの激しい思慕を

私は見落としているのではないか？

詩人が抱き続ける懷疑は

人魚姫の切なる願いに気づくことなく

王子に「陸」の姫との婚姻を選ばせ

人魚を海の泡と消える定めに

いやおうもなく追い込んでいく

「陸」の王子を刺し殺すならば

再び人魚の生命を得ると

「海」の眷属はナイフを渡して語りかけるが

「海」の娘は自ら消え去る道を選んだ

一度は泡と消えた人魚に

空気の娘の一員として また新たな命を与え

煉獄に置いた詩人の思いは

すくい得なかった形無きものへの

詩人の深い悔恨と懺悔

詩人は人智を超えた大いなるものへ

しめやかに「海」の娘を差し出して

その救済を 祈る

# 線

青木由弥子

生き生きとした水の姿を

変幻自在なその一瞬を

いかにして平面に

動きのままに封じこめるか

レオナルド・ダ・ヴィンチが

執拗に描きとった

動きの線描

「水の研究」

彼の手稿に残された

苦闘と工夫とその痕跡

みなぎる力を写し取った線描の

奇妙なまでの既視感

呼応するのは応拳の線か

滝の水流 早瀬の波紋

あるいは光琳

渦を巻く線 うねる波濤

数百年の歳月をかけ

名も無き画工が選り取った

水の動きのその動線を

なぞり写していく繰り返しの中

ぎこちなく抜け殻と成り果てた動きを

取り戻した応奉の尽力

抜け落ちた水のいのちを

鮮やかに照らす光琳の膂力

あるいは潜まっている獣が蓄えている力

その緊迫した筋力と肢体を描きとる若冲の線

あるいは空虚を柔らかに切り裂いて

大気の鳴動もろとも鎮まる等伯の線…

よどみない動きの中に

私たちは「いのち」を感じとる

それを見る「わたし」

それに気づく「わたし」

そもそもこの世に「線」は存在していない

糸や毛髪とて質量を持つ

輪郭線や動線は観念の中にのみ在ることを

我々はつい忘れている

線は私たちの中にある

画家のまなざしの中に

国境を引く為政者の中に

年表で区切る歴史家の中に

空間を区切ることで 生み出されるいのち

空間を区切ることで 殺されるいのち

私たちの頭脳の中の電気信号も

線で伝達されるのではなかったか

系図を書くのに線を引く

文字を書くのに線を引く

一本の線が

海と空／大地と天空を一瞬で分ける

人と人をつなぐ赤い糸も

親と子を結ぶ絆というなにがしかも

みんな線だ

友情の範囲を決める線引きも線だ

区切る線

切り離す線

切り捨てる線・・・

すべて人の手によって引かれる線

一度引かれてしまった線は

容易には消せない

けれども人の手に成るものならば

いつかきつと 取り除くことができる

線の無い国がどこかにあるはずだ

何かが生まれてくる混沌

霧にかすみ すべてが定かではなく

自分の輪郭すら見当たらない 心地よい不安

無の空間で線を引く前に

その線が生きた線であるかどうか

つなぐ線／結ぶ線／守る線であるかどうか

我々は常に吟味しているか

線を引くときは一息に

迷うことなくためらうことなく

筆を走らせねばならない

迷えばその線は たちどころに死ぬ

不分明という平穩

そこに線を引く快感こそが

人を 線を引くことへと駆り立てる

原動力となってきたのではないか

光琳の端麗

若冲の精緻

等伯の気魄

…が惹起するつかのまの随想

# 詩による試論…たとえば「雪の女王」について

青木由弥子

「理性の鏡」に鎮座している

雪の女王が奪い去るのは

バラの香る屋根裏部屋で

幼いまどろみに憩う少年

雪の女王の唇に触れ、少年の心は凍りつく

少年の心を惹きつけるのは

今はもはや、数学や科学、地理歴史のみ

無知を恐れ倨傲に溺れ

貪るように知識を詰め込み

心を凍りつかせていく少年こそは

詩人の内なる理性の化身

少年を殺伐たる知の旅にいざない

雪の女王に従わせるのは

悪魔の作り出した鏡のかけら

自らを守り飾るために

他者の欠点をあげつらう

ゆがんだ批評精神こそが

悪魔の作り出した鏡の正体

そのかけらが心臓と目に突き刺さり

少年カイは

雪の女王のそりに乗って

少女ゲルダのもとから消える

少女は少年を探すために

一人旅立つ決心をする

少女は日の光とも川とも花とも小鳥たちとも

話の出来る幼子なのだ

少女は詩人の中に生きる童心

理性から引き裂かれ

苦悩に身もだえしている感性

少女は赤い靴と引き換えに

川の流れにその身をゆだねる

それは虚栄と自らの意思を捨てて

無意識の流れに身を任せんとする

詩人の固い決意の表れ

少女の旅は

詩人の心をさまよう旅だ

常春の園で花々のおしゃべりに耳を傾け

影の集う秋深い城で理想の夫婦を垣間見る

森の奥では自らの分身である山賊娘と友達になり

北の大地で「全てを知る老婦人」に助けられて

ゲルダはついに雪の女王の門前に立つ

武器はカイへの熱い想いと

祈りの言葉の生む奇跡だけ

凍りついたカイの心を溶かし目覚めさせるのは  
困難な旅を乗り越えてきたゲルダの流す熱い涙

「もしお前が『永遠』を見つげられたら

お前を自由にしてあげよう

それにお前に全世界と

新しいスケート靴を一足贈ってあげよう」

雪の女王の語る言葉は

凍りついた理性の世界を軽やかにすべり行くのに

詩人が必要とする鍵なのだ

カイはゲルダの愛の力で

『永遠』をその場に見つける

理性界に氷漬けにされることなく

ゆがんだ批評精神に毒されることもなく

情愛と真心によって

少年は救い出されるのだ

手に手を取って向かう先は

バラの花香るふるさとの家

体は大人でありながら、心は子どもそのままの世界

知的虚栄に突き動かされ

童心を離れた自分の心を

鍛え戒め、再びひとつにするために

詩人は長い旅に出たのだ

あどけない少女ゲルダと共に

『雪の女王』アンデルセン作大塚勇三訳 福音館書店 参照